次回はどのような内容を希望されますか。

もう少し、身近な題材にしてもらえれば、想像がつきます。	/行政職 /1年未満
もう少し講義を聞いてみたかった。(初心者なので)	/行政職 /1年未満
講義と訓練	/行政職 /1年未満
今回の形式が良いと思いますが、時間が足りなかったような気がします。	/行政職 /1年未満
ロールプレイをしてみてはいかがでしょうか。行政ーマスコミ／行政ー住民など	/行政職 /1～3年未満
具体的な食品安全に関するデータを示したレクチャー	/行政職 /1～3年未満
最初のことわりにもありましたが、通常のリスクコミュニーションの手法の訓練を期待していた部分もあるので、そのようなものをお願いします。	/行政職 /1～3年未満
自分がリスクコミュニケートする場合(＝スポークスパースン)となる場合の具体的なテクニックに関する訓練など	/行政職 /1～3年未満
食料管理の法と行政の対応の細かいことについて	/行政職 /1～3年未満
通常のリスクコミュニケーションの方法について、事例をもとにしたディスカッション、ロールプレイ	/行政職 /1～3年未満
日常レベルのリスクコミュニケーションの訓練	/行政職 /1～3年未満
報道の方法。 記者発表など、どの時点でどのような部分を発表すればよいか等	/行政職 /1～3年未満
輸入食品に関連した対策	/行政職 /1～3年未満
立場を地方行政レベルまで引き下げての訓練。マスコミレクチャーの実技練習等	/行政職 /3～5年未満
この様な形でまた行ってほしい。自分自身だけでなく若手や管理部門の担当者に受けさせてみたい。	/行政職 /10年以上
リスクコミュニケーションは、その必要性に応じて実施すべきものと認識している。現実には、BSEなど必要以上に実施され、政治的な影響もある。リスクコミュニケーションの必要性について議論できる内容であれば参加したい。	/行政職 /10年以上
平時のリスクコミュニケーションについて	/行政職 /10年以上
対象を変えて同じものでは？	/研究職 /3～5年未満
(食品衛生)リスクコミュニケーションについて、「消費者と行政が、平時から取り組むべき課題」は何か？ 地域に根ざしたリスクコミュニケーションの実際について	/不明

問4. あなたはリスクコミュニケーションについてどう思いますか。

職種	年数	とても重要	まあまあ重要	あまり重要でない	ほとんど重要でない	総計
行政職	1年未満	7	1			8
	1年～3年未満	13	1			14
	3年～5年未満	1				1
	5年～10年未満	1				1
	10年以上	5	1			6
	計	27 (90.0%)	3 (10.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満		1			1
	1年～3年未満	2				2
	3年～5年未満	2				2
	5年～10年未満					
	10年以上					
	計	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1				1
	1年～3年未満		1			1
	3年～5年未満					
	5年～10年未満	1				1
	10年以上					
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		2 (66.7%)	1 (33.3%)	(0.0%)	(0.0%)	3 (100.0%)
計		35 (85.4%)	6 (14.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	41 (100.0%)

問5. あなたはこの会議に出席して、正しく情報伝達できる自信がつきましたか。

職種	在籍年数	参加前より自信がついた	変化なし	参加前より自信がなくなった	無回答	総計
行政職	1年未満	4	3	1		8
	1年～3年未満	8	6			14
	3年～5年未満	1				1
	5年～10年未満	1				1
	10年以上	3	1	2		6
	計	17 (56.7%)	10 (33.3%)	3 (10.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満	1				1
	1年～3年未満	1	1			2
	3年～5年未満		2			2
	5年～10年未満					
	10年以上					
	計	2 (40.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1				1
	1年～3年未満	1				1
	3年～5年未満					
	5年～10年未満		1			1
	10年以上					
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		3 (100.0%)	(0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
計		24 (58.5%)	14 (34.1%)	3 (7.3%)	0 (0.0%)	41 (100.0%)

問6. あなたはリスクコミュニケーションについて今後研鑽が必要であると思いますか。

職種	在籍年数	とても思う	まあまあ思う	あまり思わない	ほとんど思わない	無回答	総計
行政職	1年未満	5	3				8
	1年～3年未満	12	2				14
	3年～5年未満	1					1
	5年～10年未満	1					1
	10年以上	3	2	1			6
	計	22 (73.3%)	7 (23.3%)	1 (3.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満		1				1
	1年～3年未満	2					2
	3年～5年未満		1			1	2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	2 (40.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1					1
	1年～3年未満		1				1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満	1					1
	10年以上						
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
計		28 (68.3%)	11 (26.8%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)

問7. あなたの職場において、リスクコミュニケーション(情報伝達)について工夫が必要であると思いますか。

職種	在籍年数	とても思う	まあまあ思う	あまり思わない	ほとんど思わない	無回答	総計
行政職	1年未満	5	3				8
	1年～3年未満	10	4				14
	3年～5年未満	1					1
	5年～10年未満		1				1
	10年以上	2	4				6
	計	18 (60.0%)	12 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満	1					1
	1年～3年未満	2					2
	3年～5年未満	2					2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1					1
	1年～3年未満		1				1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満	1					1
	10年以上						
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
計		28 (68.3%)	13 (31.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	41 (100.0%)

問8. あなたの職場において、リスクコミュニケーション(情報伝達)について改善できるところがあると思いましたか。

職種	在籍年数	とても思った	まあまあ思った	あまり思わなかった	ほとんど思わなかった	無回答	総計
行政職	1年未満	3	5				8
	1年～3年未満	6	8				14
	3年～5年未満	1					1
	5年～10年未満	1					1
	10年以上	1	4			1	6
	計	12 (40.0%)	17 (56.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.3%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満		1				1
	1年～3年未満	1	1				2
	3年～5年未満	2					2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	3 (60.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1					1
	1年～3年未満	1					1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満		1				1
	10年以上						
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
計		17 (41.5%)	23 (56.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)

問9. 今日の内容について職場(関連部署を含む)で共有する必要があると思いますか。

職種	在籍年数	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	総計
行政職	1年未満	2	4	2			8
	1年～3年未満	10	4				14
	3年～5年未満	1					1
	5年～10年未満	1					1
	10年以上	1	3	2			6
	計	15 (50.0%)	11 (36.7%)	4 (13.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満		1				1
	1年～3年未満	1	1				2
	3年～5年未満	1	1				2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	2 (40.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満	1					1
	1年～3年未満	1					1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満	1					1
	10年以上						
	計	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		(0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
計		20 (48.8%)	17 (41.5%)	4 (9.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	41 (100.0%)

問10. あなたは、リスクコミュニケーションに関する資料(書籍など)を持っていますか。

職種	在籍年数	十分ある	まあまあある	あまりない	ほとんどない	総計
行政職	1年未満		1	3	4	8
	1年～3年未満		5	5	4	14
	3年～5年未満		1			1
	5年～10年未満		1			1
	10年以上		1	5		6
	計	0 (0.0%)	9 (30.0%)	13 (43.3%)	8 (26.7%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満				1	1
	1年～3年未満		1		1	2
	3年～5年未満	1		1		2
	5年～10年未満					
	10年以上					
	計	1 (20.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満			1		1
	1年～3年未満			1		1
	3年～5年未満					
	5年～10年未満		1			1
	10年以上					
	計	0 (0.0%)	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	計	1 (2.4%)	14 (34.1%)	16 (39.0%)	10 (24.4%)	41 (100.0%)

問11. あなたは、リスクマネジメントに関する資料(書籍など)を持っていますか。

職種	在籍年数	十分ある	まあまあある	あまりない	ほとんどない	無回答	総計
行政職	1年未満		1	3	4		8
	1年～3年未満		3	8	3		14
	3年～5年未満		1				1
	5年～10年未満		1				1
	10年以上		1	4	1		6
	計	0 (0.0%)	7 (23.3%)	15 (50.0%)	8 (26.7%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満				1		1
	1年～3年未満			1	1		2
	3年～5年未満		1	1			2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満			1			1
	1年～3年未満			1			1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満			1			1
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
不明		0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	1 (33.3%)	3 (100.0%)
計		0 (0.0%)	8 (19.5%)	22 (53.7%)	10 (24.4%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)

問12. あなたは、この会議以外にリスクコミュニケーションやリスクマネジメントに関する勉強会に参加した経験がありますか。

職種	在籍年数	ある (1回)	ある (2回)	ある (数回)	ない	無回答	総計
行政職	1年未満	3	1		4		8
	1年～3年未満	4	2		8		14
	3年～5年未満			1			1
	5年～10年未満				1		1
	10年以上	1	1		4		6
	計	8 (26.7%)	4 (13.3%)	1 (3.3%)	17 (56.7%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満				1		1
	1年～3年未満				2		2
	3年～5年未満		1		1		2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	4 (80.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満				1		1
	1年～3年未満				1		1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満				1		1
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (66.7%)	1 (33.3%)	3 (100.0%)
	計	8 (19.5%)	5 (12.2%)	1 (2.4%)	26 (63.4%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)

問13. あなたの職場はリスクマネジメントやリスクコミュニケーションについて十分理解できていると思いますか。

職種	在籍年数	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	総計
行政職	1年未満		2	3	3		8
	1年～3年未満		8	4	2		14
	3年～5年未満			1			1
	5年～10年未満		1				1
	10年以上		2	4			6
	計	0 (0.0%)	13 (43.3%)	12 (40.0%)	5 (16.7%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満				1		1
	1年～3年未満		1	1			2
	3年～5年未満			1	1		2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満			1			1
	1年～3年未満			1			1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満		1				1
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	0 (0.0%)	(0.0%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	3 (100.0%)
	計	0 (0.0%)	15 (36.6%)	17 (41.5%)	8 (19.5%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)

問14. 本日の感想をご記入ください。

いい経験になりました。	/行政職 /1年未満
グループワークは楽しくできた。 ラウンド毎に質問があり、グループ毎に報告を行った後に講評があったが、わかり易い答えを説明してくれればよかった。	/行政職 /1年未満
リスクコミュニケーション自体が漠然としてしまっているので(私自身が・・・)、はっきり見えた感じがしました。	/行政職 /1年未満
起こり得る危機を想定して対策を検討していくことは大事なことだと感じました。現在の職場でも起こってから対応していくことばかりなので今後取り入れて職員のトレーニングも行い質を上げていきたいと感じました。	/行政職 /1年未満
同時通訳では、難しいのではないでしょうか。 先生の発言内容が正確に伝わらないと思う。	/行政職 /1年未満
理解できていると思っていたが、目の付け所が不十分であった。	/行政職 /1年未満
コミュニケーションよりも、マネジメントの方が重点だったように感じました。(コミュニケーションの前提としての基盤づくりは大半だと感じますが)	/行政職 /1年～3年未満
すばらしい研修会であった。	/行政職 /1年～3年未満
なかなかグループワークで考えを述べるのは、むずかしい。そもそも、グループワークの中で仕事を進めることが少なかったように思う。	/行政職 /1年～3年未満
マスコミ発表の仕方etc についての具体的マニュアルがない。	/行政職 /1年～3年未満
ロールプレイで、食品安全を行うために必要な情報をもう少し提供してほしかった。 でないと、途中の「提言」について食品安全担当者として必要不可欠な情報なのか、個人的(専門的)好奇心からの情報を要求しているのか、わからない場面があった。	/行政職 /1年～3年未満
危機が起きた場合、様々な立場で、いろいろな角度から、分析することが大切と改めて感じました。	/行政職 /1年～3年未満
午前の講義は、もう少し時間を取った方がよい。	/行政職 /1年～3年未満
自らの立場の設定がいまひとつ、はっきりしなかったので、どこまでを考えるべきかが、あいまいになりがちであった。	/行政職 /3年～5年未満
とても全体的に参考になった。討議の時間がもう少しほしかった。(20分では短い)	/行政職 /10年以上)
具体的な話の割合を増やして欲しい。言葉だけの説明は、理解がむずかしい。	/行政職 10年以上
事例が国レベル、国際レベルであり、自分の担当業務とは、少しかけはなれている。	/行政職 10年以上
通常の状態で行政が行っているリスクコミュニケーションについての研修と思っていたが、違っていた。ただし良い期待はずれだった。本当にリスクコミュニケーションの技量が試されるのは危機時だと思う。食品担当者は常に危機と対じする可能性があるのでトレーニングとしては大変必要だと思う。	/行政職 10年以上
国家的な視点での考え方を経験できたため、大変よい勉強になりました。	/研究職 /1年未満
自分達の考え、活動などの決定の反映、非反映について、何も影響せずに次へ進むので、何が変化しているのか不明。少し大きすぎるgpなのでしょうか。	/研究職 /3年～5年未満
首相に助言する立場というのは、かけはなれていて、イメージするのが困難。	/その他 /1年未満
具体的な作業を伴うので理解が深まったと思う。	/その他 /1年～3年未満
行政と大学が混じってて良いです！ありがとうございました。	/その他 /5年～10年未満
次のステップとして、どのような研修を受ければ良いのか、教えていただきたい。	/不明

問15. 本日の講師やワークショップの内容について、質問などがありましたらお書きください。

ワークショップの中で常設食品安全諮問委員会のメンバーという設定でしたが、その中で意思決定をしていったのですが、食品のことだけで良いのか環境や他の関係あるところまで決定すべきか迷いました。いかがなものでしょうか？	/行政職 /1年未満
組織として確立していくには、どのようにしていくべきか、具体的な方法を、考えて行くべきだと思うが、どのようにしたら良いかわからない。	/行政職 /1年未満
同時通訳は、慣れていないとつらいものがあります。	/行政職 /1年未満
とても実践的なシナリオ、ありがとうございました。	/行政職 /1～3年未満
外国におけるリスク管理の一端がうかがえて、とても勉強になった。	/行政職 /3～5年未満
日本の人達のシステムが、もう少し分かってもらう必要があるのでは。	/研究職 /3～5年未満
evaluation の回答がきけてヨカッタです！！一生懸命リスコミを実施しても評価されない…成功した！という指標がないと、行政にも示しずらいなーと思ったからです。逆に失敗したという結果もこれから出すべきです。	/その他 /5～10年未満

問16. 研究班に期待するところがあればお書きください。

県レベルではいろいろなリスクコミュニケーションについての取り組みを実施しているようですが市のレベル(政令指定都市、中核市除く)ではなかなか浸透していません。今後も研究、研修を通じて勉強させていただきたいと思います。今回も参考になりました。ありがとうございました。	/行政職 /1年未満
想定通り、高度な内容でした。	/行政職 /1年未満
地方公共団体のリスクコミュニケーションのあり方について	/行政職 /1年未満
ある程度の対応マニュアルの作成をお願いします。	/行政職 /1～3年未満
国内法に準拠した、危機管理方法としてほしい。	/行政職 /1～3年未満
今後とも研究を続けてください。	/行政職 /1～3年未満
もっと活動内容をアピールしてほしい。	/行政職 /3～5年未満
今回の研修に関して、「題名」が合っていないと思うのですが。ex「食に関する健康危機発生時のリスクコミュニケーション」とか。	/行政職 /10年以上
平常時のリスクコミュニケーションについて取り上げて欲しい。	/行政職 /10年以上
リスクコミュニケーター、ファシリテーターの訓練もあるとうれしいです。	/その他 /5～10年未満

平成17年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安全性高度化推進研究事業）
健康保護を目的とした食に関するリスクコミュニケーションのすすめ方に関する研究
（主任研究者　丸井　英二）
分担研究報告

マス・メディアの情報伝達に関する研究
－新聞における報道の実態－

分担研究者　堀口　逸子（順天堂大学医学部）
研究協力者　赤松　利恵（お茶の水女子大学生活科学部）

研究要旨
本研究では、2005年に見直された妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項について、新聞各社がどのように報道したかその実態を調査した。まず、件数、掲載日、掲載面など客観的なデータを調べ、その後に、新聞各社でどのように報じていたか、厚生労働省が注意事項の発表時に、強調していた「風評被害のないように」という点に焦点をあてて検討した。その結果、厚生労働省の報道に関連する記事は、全国5紙で12件あった。新聞社ごとの記事の数は最も多いところは、4件（読売新聞）、最も少ないところで1件（毎日新聞）であった（それぞれ1社）。また、厚生労働省の留意点を守って記述していたか調べた結果、6項目全ての留意点を含んだ報道を行った新聞社はなかったが、新聞社によって0項目から5項目の違いがあり、新聞社によって報道のスタイルが異なることがわかった。このような実態を知ることは、マス・メディアにおけるリスク情報の伝達を考える上で必要であると考える。さらに、本調査は、一般の人々のメディアリテラシーを高めるためにも、基礎的資料を提供した。

A. 目的

2005年妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項が見直された[1]。妊婦のメチル水銀耐容摂取量は2003年に厚生労働省は妊婦の魚介類摂取に関する注意事項を出しているが、国際専門会議が耐容摂取量を下げたため、日本も今回耐容摂取量を見直すことになった。

魚介類の摂取量の規制は、魚介類に含まれるメチル水銀が胎児の健康に悪い影響を及ぼす可能性があるという理由があるからだ。「可能性がある」という、不確実性を伴うリスク情報は、一般的に人を惑わす。しかし一方で、危険を未然に防ぐ情報として活用できれば、良い情報になる。リスク・コミュニケーションにおいては、情報をいかに活用できるかが重要といえる。

リスク情報をメリットとして活かすためには、客観的に情報を入手することがまず必要だと考える。しかし、リスク情報はそのあいまいさから、マス・メディアではセンセーショナルなニュースとして報道されやすい[2]。今回の水銀に関する注意事項の発表においても、「風評被害が生じないこと」を強調していた[1]。

そこで、本研究では2005年に見直された妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項について、マス・メディアがどのように報道したかその実態を調査する。ここではマス・メディアの中から、新聞をとりあげる。新聞は健康情報の入手先としては、テレビやラジオより劣るが[3]、テレビやラジオで聞いた情報を確認するために用いる[4]、テレビやラジオと比較して、健康に対して積極的な人が情報源として利用するなど[5]、テレビやラジオとは違った意味で一般社会

へ影響を及ぼす。

ここでは、2005年妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項が見直しに関する記事について、新聞各社がどのように報道していたのか、まず、件数、掲載日、掲載面など客観的なデータを調べ、次に、新聞各社でどのように報じていたか、質的に検討する。質的な検討には、厚生労働省が注意事項を発表する際、強調していた「風評被害のないように」という点に焦点をあてて検討する。

B.対象と方法

全国で販売された全国紙を対象とした。対象となった新聞は、朝日新聞、日経新聞、毎日新聞（地方版、西部版、大阪版、中部版、北海道版含む）産経新聞、読売新聞（西部読売新聞、大阪読売新聞、東京読売新聞含む）の5紙の朝刊と夕刊である。記事検索の対象期間は、2005年8月12日から2005年11月15日までとした。

新聞記事の収集には、新聞記事のデータベース、日経テレコム21（http://www.nikkei.co.jp/telecom21/）を用いて、「水銀」の単語が含まれている全ての記事を抽出した。その結果、水俣病等にも関連している記事も含まれていたので、魚介類に関する記事のみハンドサーチで抽出した。その結果、記事は17件であった。

この17件の記事について、以下の項目について確認した。1)新聞名、2)掲載日、3)朝刊か夕刊か、4)地方版か、5)1ページ掲載か、6)文字数、7)写真・表の有無、8)記事の種類、9)ニュース記事の内容。なお、記事の種類は、①ニュース記事、②ニュースを受けて組まれた特集・解説記事、③投稿記事、④その他（コラム、今日の一週間等）の4つに分類した。

結果はまず、新聞社ごとに客観的なデータをまとめ比較する。その後、ニュースおよび解説記事の内容を新聞社ごとで質的に評価した。評価の方法として、厚生労働省が注意事項で述べた留意点をチェック項目として利用し、各新聞者が報道した記事の中に含まれていたか、新聞社ごとに評価した。具体的な内容は、表1の通りである。たとえば1番目の項目は、注意事項の留意点では、「魚介類は健康的な食生活を営む上で重要な食材であること」と書かれていた。したがって、チェック項目では、これが書かれているか否かを評価者に判定させるために、「魚介類は健康的な食生活を営む上で重要な食材であることが書かれていましたか」とした。ただし、7番目の項目は、注意事項の留意点では、「消費者に注意事項を正確に理解してもらうことが必要であること」という項目であったため、チェック項目では「注意事項を正確に理解してもらうよう、努めていると思いましたか」に変え、新聞社の姿勢を総合的に評価する項目とした。二人の評価者が別々にこれらのチェック項目を「書かれていた」、「書かれていなかった」、「わからない」の中から1つ選択する形で評価した。意見が食い違ったときは、第三者が加わり最終的な評価を行った。ただし、7番目は、主観的な評価であったため、2人の回答をあわせることはしなかった。評価の指標は「思った」「思わなかった」「わからない」とした。

表1　記事内容に用いたチェック項目

1	魚介類は健康的な食生活を営む上で重要な食材であることが書かれていましたか？
2	魚介類は食物連鎖の過程で水銀を蓄積することが書かれていましたか？
3	検討している水銀の影響は、あったとしても胎児の将来の社会生活に支障のあるような重篤なものでないことは書かれていましたか？
4	妊婦については、一定の注意をした上で魚介類を接触することが重要であることは書かれていましたか？
5	水銀濃度が高い魚介類を偏って多量に食べることは避けて、水銀の摂食量を減らすことで、魚食のメリットとの両立が可能であることは書かれていましたか？
6	妊婦が注意事項の対象であり、子どもや一般の方々は対象外であることは書かれていましたか？
7	この新聞社は、上記の注意事項を正確に理解してもらうよう、努めていると思いましたか？

（倫理面への配慮）

本研究では、新聞記事のデータベースのみを対象とするため、研究倫理的な問題はないと考

える。

C.結果

17件の記事の概略は表2の通りである。17件のうち、5件は関連が低い記事と考え、検討には、この5件を除いた12件を扱うこととした。除外した5件の理由は次の通りである。1と13（表中の番号、以下同様）：本の紹介であったため、12：講演会の案内であったため、16：地方のニュースであったため、17：関連商品の紹介であったため。

12件についての詳細は次の通りである。まず、最初の報道は、今回の検討食品安全委員会が見直した耐容摂取量を公表した6月8日の日の夕刊あるいは、翌日の朝刊で5社全てがニュース記事として扱っていた。毎日新聞は夕刊ではあるが1面報道をしていた。社説を掲載していたのは、読売新聞1社でニュース記事を報道した同じ日に掲載していた。次の報道は、8月13日であり、これは、食べ過ぎないための摂取量の試案を発表した翌日である。毎日新聞を除いた4社がニュース記事として報道していた。読売新聞、日本経済新聞の2社が報道した11月3日は、クロムツを注意対象種から除外した最終結論がまとまった翌日の報道であった。食べ過ぎないための摂取量の試案が出されたときは、読売新聞、日経新聞が表や図を用いて説明していた。新聞ごとの報道概要を表3にまとめた。

表3　「妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項が見直し」に関する記事全12件の新聞社ごとの概要

	毎日新聞	日本経済新聞	産経新聞	読売新聞	朝日新聞
記事数	1	3	2	4	2
平均文字数	566	579.3±359.3	480.5±21.9	558.3±357.5	395.0±137.2
図表を含む記事数	0	1	0	1	0
1面報道	有（夕刊）	無	無	無	無
社説	無	無	無	有	無

次に、厚生労働省が掲げた留意点を記載して報道していたが、新聞社ごとに調べた。その結果、表4の通り、全ての新聞社が記載している留意点はなかった。3社が掲載していた留意点は、1の「魚介類は健康的な食生活を営む上で重要な食材であること」、2の「魚介類は食物連鎖の過程で水銀を蓄積すること」、4の「妊婦については一定の注意をした上で魚介類を摂食することが重要であること」、5の「多量に食べるのは避けて、水銀の摂食量を減らすことで魚介類のメリットとの両立が可能であること」の4点であった。一方、1社しか記述していなかった留意点は、3の「水銀の影響はあったとしても胎児の将来の社会生活に支障のあるような重篤なものではないこと」と6の「妊婦が注意事項の対象であり、子どもや一般の方々は対象外であること」であった。全社の3の「水銀の影響はあったとしても胎児の将来の社会生活に支障のあるような重篤なものではないこと」の留意点は、朝日新聞が「将来支障が出るようなものではない」とはっきり述べていた。日本経済新聞は、8月13日の記事で、「音を聞いたときの反応が一千分の一秒以下のレベルで遅れる可能性がある」と、若干触れていたが、この症状が重篤なものではないという記述はなかったため、書かれていないものとした。

後者の6について、「妊婦を対象」という書き方は、全ての新聞社が用いていたが、「子どもや一般の人は対象外」という書き方をしているのは、読売新聞だけであったことから読売新聞1社となった。読売新聞は、6月9日に、「妊婦か妊娠している可能性のある人だけを対象としている」と記し、さらに8月13日に、「妊婦以外は普通に食べてもまったく問題ない」と述べている。このように、対象者を強調している書き方は、他になかった。

「注意事項を正確に理解しているよう、努めていたか」の回答については、2人の評価者の

表2　抽出された「魚介類に関する水銀」の新聞記事の概要　全17件

	種類	見出し	掲載日	新聞社			面	図表	文字数
1	解説（情報）	「クジラの死体はかく語る」、荻野みちる氏――海洋汚染身をもって（あとがきのあと）	2005/6/5	日本経済新聞		朝刊	25	有	815
2	ニュース	メチル水銀：魚介類などからの耐容摂取量、従来の６割に――食品安全委	2005/6/8	毎日新聞		夕刊	1	無	566
3	ニュース	魚介類に含まれるメチル水銀、妊婦の摂取４割減――食品安全委、基準案提示。	2005/6/8	日本経済新聞		夕刊	16	無	496
4	ニュース	魚介類のメチル水銀　妊婦の「耐容摂取量」４割減　食安委調査会リスク評価	2005/6/9	産経新聞	東京	朝刊	29	無	496
5	ニュース	メチル水銀摂取量　妊婦は現行比の４割減　食品安全委が基準試案	2005/6/9	読売新聞	東京	朝刊	38	無	441
6	解説（社説）	［社説］水銀含有食品　魚を避けるほどのリスクはない	2005/6/9	読売新聞	東京	朝刊	3	無	1009
7	ニュース	魚介類のメチル水銀の耐用摂取基準を厳格化、試案　食品安全委	2005/6/9	朝日新聞		朝刊	37	無	298
8	ニュース	「マグロ食べ過ぎ妊婦は避けて」　厚労省部会が目安案	2005/8/13	産経新聞	東京	朝刊	24	無	465
9	ニュース	妊婦さん食べ過ぎ注意　クロマグロなど９種追加　メチル水銀、胎児に悪影響も	2005/8/13	読売新聞	東京	朝刊	2	図	627
10	ニュース	妊婦さん、マグロ控えめに　水銀、胎児に影響　厚労省新基準	2005/8/13	朝日新聞		朝刊	34	無	492
11	ニュース	クロマグロやメバチ、妊婦は食べ過ぎ注意――対象魚介類１６種に拡大。	2005/8/13	日本経済新聞		朝刊	34	表	973
12	解説（情報）	「健康で安全な魚食文化」シンポジウム、尿漏れに関する公開講座、他（がいどガイド）	2005/9/27	日本経済新聞		夕刊	18	無	1010
13	解説（情報）	月刊誌「食べもの通信」：安全、健康伝え３５年　１６日・東京で創刊記念交流会	2005/10/7	毎日新聞		朝刊	17	無	545
14	ニュース	妊婦に悪影響の魚介類からクロムツを除外／薬事・食品衛生審議会	2005/11/3	読売新聞	東京	朝刊	33	無	156
15	ニュース	クロマグロなど、妊婦の食べ過ぎ、注意事項見直し――厚労省、対象１５種。	2005/11/3	日本経済新聞		朝刊	34	無	269
16	ニュース	水俣湾の水銀濃度など調査へ魚類捕獲＝熊本	2005/11/10	読売新聞	西部	朝刊	28	無	271
17	解説（特集）	【近ごろ都に流行るもの】「毒出し」グッズ　現代人の不安わしづかみ	2005/11/15	産経新聞	東京	朝刊	26	有	1797

※太字が「妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項が見直し」に関する記事　計12件。

表4　厚生労働省の発表した注意事項作成時の留意点の記載について、新聞社ごとの比較

		毎日新聞	日経新聞	産経新聞	読売新聞	朝日新聞
1	魚介類は健康的な食生活を営む上で重要な食材であることが書かれていたか	×	○	○	○	×
2	魚介類は食物連鎖の過程で水銀を蓄積することが書かれていたか	×	○	×	○	○
3	検討している水銀の影響は、あったとしても胎児の将来の社会生活に支障のあるような重篤なものでないことは書かれていたか	×	×	×	×	○
4	妊婦については、一定の注意をした上で魚介類を接触することが重要であることは書かれていたか	×	○	○	○	×
5	水銀濃度が高い魚介類を偏って多量に食べることは避けて、水銀の摂食量を減らすことで、魚食のメリットとの両立が可能であることは書かれていたか	×	○	×	○	○
6	妊婦が注意事項の対象であり、子どもや一般の方々は対象外であることは書かれていたか	×	×	×	○	×
7	この新聞社は、上記の注意事項を正確に理解してもらうよう、努めていると思ったか	×、×	○、？	×、×	○、○	×、？

※○・・・「書かれていた」「思った」、×・・・「書かれていなかった」「思わなかった」、？・・・「わからない」

意見を表4に示した。読売新聞の報道については2人とも「努めていた」と評価し、一方、毎日新聞と産経新聞については、2人も「努めていなかった」と評価した。

D．考察

本研究では2005年に見直された妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項について、新聞社がどのように報道したかその実態を調査する。全国紙である5紙を調べた結果、新聞社によって、ニュースの取り扱いが異なることがわかった。

魚介類に含まれるメチル水銀が胎児に害を及ぼす可能性があるという情報は、一歩間違えると、「魚介類を食べると危険」という情報となる。このことを恐れ、厚生労働省は「妊婦の魚介類の摂食と水銀に関する注意事項の見直しについて」の発表で、「いわゆる風評がでないように」と強調していた。今回、チェック項目として用いた内容を箇条書きでまとめ、これらの点を注意して今回の発表を正確に理解することを強調していた。

本研究で、新聞報道の全てが読者が正確に理解できるよう努めているとは言えなかった。新聞各社の方針によって、記事スペースの分配や書き方の特徴にあることから、全社が同じ書き方で報道することはないと考える。しかし、発信もとの伝えたいことは出来る限り、努力する姿勢は必要ではないだろうか。リスクばかりを強調する記述で読者の不安をあおらないよう[6]、リスク・コミュニケーターとしてのマス・メディアの意識の向上も必要である。

受け手である読者も、より批判的な視点で情報を読取る能力を身につけることが必要である。このように、新聞社によって報道の違いがあること、さらに、発信もとの伝えたいことを網羅しているとは限らないことを理解して、記事を読むことが大切であると考える。

マス・メディアを介したリスク・コミュニケーションは、一対一のコミュニケーションより、より情報の伝達に注意が必要である。今回の実態調査の結果が、マス・メディアの報道のあり方を考える上での資料、また、一般の人々のリスク情報の読み取りの向上に、役立つことを期待する。

引用文献

1) 厚生労働省(2005). 妊婦への魚介類の摂食と水銀に関する注意事項の見直しについて http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/iyaku/syoku-anzen/suigin/051102-1.html[Accessed on 2006/2/9]

2) Shuchman, M., & Wilkes, M.S. (1997). Medical scientists and health news reporting: a case of miscommunication. Annals of Internal Medicine, 126, 976-982.

3) 厚生労働省（2003）平成１２年　国民栄養調査結果の概要について http://www.mhlw.go.jp/houdou/0111/h1108-3.html [Accessed on 2006/2/9]

4) 財団法人日本新聞協会（2001）新聞のポジショニングと新聞広告の役割.(社)日本新聞協会.東京.

5)Dutta-Bergman, MJ（2004）Primary sources of health information: Comparisons in the domain of health attitudes, health cognitions, and health behaviors. Health Communication, 16,273-288.

6) 日和佐信子（2005）食品の安全と安心とリスクコミニュケーション,食品衛生学雑誌, 46:J295-297.

F. 健康危険情報

この研究において健康危険情報に該当するものはなかった。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権

この研究において知的財産権に該当するものはなかった。

＜資料＞
※下線とその番号は、チェック項目が書かれていたと判断した箇所。

毎日新聞

A-1. メチル水銀：魚介類などからの耐容摂取量、従来の６割に－－食品安全委 2005/06/08

魚介類などの食品を通じて体内に入る「メチル水銀」について、摂取し続けても健康に影響の出ない耐容摂取量を、１週間に体重１キロ当たり２・０マイクログラム（マイクロは１００万分の１）とする試案が８日、政府の食品安全委員会汚染物質専門調査会（座長・佐藤洋東北大教授）で示され、大筋で了承された。従来の耐容摂取量（同３・４マイクログラム）の約６割となる厳しい値だが、国連の専門家会合が０３年６月末に出した同１・６マイクログラムは上回った。

厚生労働省は７３年に現行の耐容摂取量を設定。この値に基づき０３年６月、「特に胎児に影響を及ぼす恐れがある」として妊婦などに対し、メカジキやキンメダイなど７種類の魚やクジラ類を食べる量を一定以下にするよう注意を呼び掛けていた。

しかし、その直後に国連の食品添加物専門家会議（ＪＥＣＦＡ）が耐容摂取量を同１・６マイクログラムに引き下げたため、厚労省が昨年７月、食品安全委員会に耐容摂取量の評価を依頼していた。

厚労省の呼び掛けでは、１回の摂食量を６０～８０グラムとした場合、メカジキとキンメダイは週２回以下▽バンドウイルカは２カ月に１回以下――の摂食が望ましいとされていた。水産庁の試算によると、耐容摂取量を１・６マイクログラムとした場合、メカジキを食べるのは、週１回程度が限度になるという。【高木昭午】

日本経済新聞

B-1. 魚介類に含まれるメチル水銀、妊婦の摂取４割減――食品安全委、基準案提示。 2005/06/08

魚介類に含まれ胎児の健康に悪影響を及ぼすとされるメチル水銀について、食品安全委員会の汚染物質専門調査会は八日の会合で、妊婦や妊娠の可能性のある女性の一週間の耐容摂取量は体重一キロ当たり二・〇マイクロ（マイクロは百万分の一）グラムとする案を示した。現行基準の同三・三マイクログラムより四〇％少ない量で、今後この案を基に答申に向けた議論を進める。

提示案は、デンマークのフェロー諸島など魚をよく食べる地域の小児発達疫学研究を基に算出した。

二〇〇三年に国際専門家会議（ＪＥＣＦＡ）が耐容摂取量を同三・三マイクログラムから同一・六マイクログラムに引き下げたことを受け、厚生労働省は妊婦が食べてもよい魚の許容量を見直すため、同委員会に魚介類のメチル水銀の健康影響評価を依頼していた。今後、同委員会の正式な答申を受け、具体的な新基準を決める。

[2]メチル水銀は食物連鎖を通じて大型魚や深海魚に蓄積しやすく、日本人は総水銀量の八割以上を魚介類から摂取している。厚労省は〇三年に、妊婦や妊娠の可能性のある女性を対象に、キンメダイ、メカジキの摂取は週二回以下を呼び掛けるなど魚介類七種の注意事項を公表している。

B-2. クロマグロやメバチ、妊婦は食べ過ぎ注意――対象魚介類１６種に拡大。 2005/08/13

厚生労働省は十二日、妊婦か妊娠している可能性のある女性がメチル水銀濃度の高い魚介類を食べ過ぎないよう呼びかける注意事項の見直し案をまとめた。新たにクロマグロなど一部のマグロ類を対象に追加し、計十六種の魚介類について注意喚起する内容で、同省ホームページ（ＨＰ）で公開する。

同日開かれた薬事・食品衛生審議会の乳肉水産食品部会で了承された。国民からの意見募集などを経て、十月をメドに正式決定する。

メチル水銀は胎児の健康に悪影響を及ぼすとされており、音を聞いたときの反応が一千分の一秒以下のレベルで遅れる可能性があるという。注意事項は二〇〇三年六月にキンメダイなど七種の魚介類を対象に公表。マグロ類も高い水銀濃度が示されていたが、「一回の平均摂取量が少ない」として対象から外れていた。

その後、国際機関がヒトの水銀耐容摂取量を引き下げ、欧米でもマグロ類を対象に含めるなど注意事項の改定が相次いだことから、同省は注意対象魚類の見直しを進めてきた。

見直し案では、妊婦が一回に食べる量を八十グラムとして、（１）キダイ、クロムツ、ミナミマグロなど